

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 『1Q84』における記憶再生の装置－漱石の『三四郎』を原型として－

A Device of the Memory Reproduction in "1Q84": From a Relationship between "Sanshiro" of Soseki as a Archetype

doi:10.6205/jpllat.32.201212.02

台灣日本語文學報, (32), 2012

作者/Author：曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page：21-40

出版日期/Publication Date：2012/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.32.201212.02>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



airiti

探討漱石《三四郎》為原型之《1Q84》中記憶再生的裝置

曾秋桂

淡江大學日文系教授

摘要

把村上春樹最新長篇小說《1Q84》(2009-2010)，當作一部戀愛小說來閱讀的話，男女主角天吾與青豆兩人所執著的「放學後的小學教室」共通記憶，特別引人注目。進一步再對照人類擁有的記憶再生裝置，發現男主角天吾是將「放學後的小學教室」以「顯在記憶」的方式，一點一滴回想起來。相對地女主角青豆是以「潛在記憶」的方式，自始至終保存在內心之中。此差異可以看出天吾是逐漸意識到對青豆的愛，而青豆則是始終堅持對天吾的愛。由此不禁令人連想起漱石文學中「畏懼的男人與不畏懼的女人」的個性對比。再者，《1Q84》中天吾慢慢回想起「放學後的小學教室」回憶的重要元素「高空」以及「白雲」と「月亮」，也與漱石《三四郎》(1908)雷同。《三四郎》中男主角三四郎與女主角美禰子常單獨一起觀看「白雲」。兩人單獨觀看「白雲」次數增加，三四郎越發對美禰子產生不同的情意。又加上作品中「白雲」與「月亮」的搭配組合，從中更顯露出三四郎對於美禰子的情意，由濃而轉為理智，進而被迫放棄的心情轉折。《1Q84》中「白雲」與「月亮」的搭配組合，與《三四郎》有著同工異曲之妙。

村上春樹在接受訪問時，多次表達喜歡漱石作品中的《三四郎》。透過此次的考察，不難發現村上春樹以一位漱石文學作品的閱讀者，透過閱讀《三四郎》的行為，觸動了村上本身內在的思緒，將之轉換成為記憶，進而建構《1Q84》中記憶再生裝置的「放學後的小學教室」構圖。此可謂以《三四郎》為原型，詮釋出村上春樹獨特託寓的一幕。

關鍵字：《1Q84》 「放學後的小學教室」 記憶再生 漱石
《三四郎》

**A device of the memory reproduction in "1Q84": From a
relationship between "Sanshiro" of Soseki as a Archetype**

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

When we read "1Q84" (2009-2010) of Haruki Murakami as a love story, the memory of "the classroom of the elementary school after school" is a notable scene. It is a device of the memory reproduction. Tengo has revived "the classroom of the elementary school after school" as "explicit memory". In contrast, Aomame keeps it as "implicit memory". "1Q84" has the composition of a man (Tengo) who is recognizing love by "explicit memory" and the woman (Aomame) who is convinced of love by "implicit memory". It leads to the composition called "an afraid man and the woman who is not afraid" that are man and woman relations of the Soseki literature. A memory of Tengo which "white cloud" and "moon" are accompanied by in "the high sky" in the memory of "the classroom of the elementary school after school" is similar to the scene where Sanshiro has watched "white cloud" with Mineko in "Sanshiro" (1908) of Soseki.

In an interview, Haruki Murakami state that I likes "Sanshiro" of Soseki. Haruki Murakami has replaced the thing which he internalized through a reading act of "Sanshiro" with a story of own memory and remembrance. And he has substituted it for "classroom scenery of the elementary school after school" which is a device of the memory reproduction in "1Q84". This may be called the composition of the creative allegory by Haruki Murakami.

Keyword : "1Q84", "the classroom of the elementary school after school",
memory reproduction, Soseki, "Sanshiro"

『1Q84』における記憶再生の装置

－漱石の『三四郎』を原型として－

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

要旨

村上春樹の最新長編小説『1Q84』（2009-2010）を恋愛小説として読む際、主人公天吾と青豆の二人が拘る「放課後の小学校の教室」の記憶は注目すべき場面である。それを人間の持つ記憶再生の装置として見ると、「放課後の小学校の教室」を「顕在記憶」として蘇らせた天吾に対して、青豆は、それを「潜在記憶」として保っている。

「顕在記憶」により愛を認識する男（天吾）対「潜在記憶」により一筋の愛を信念に持ち続ける女（青豆）という構図が浮かぶ。そこから漱石文学での男女関係である「恐れる男と恐れない女」といった構図が連想され、天吾が辿りついた「放課後の小学校の教室」の記憶の中心に置かれた「高い空」に「白い雲」と「月」が伴う情景は、漱石の『三四郎』（1908）で三四郎が美禰子と一緒に「白い雲」を見た場面を思わせる。

インタビューで漱石の『三四郎』が好きだと表明している村上春樹は、漱石の一読者として『三四郎』の読書行為を通して内在化したものを自らの記憶と想起の物語に置換し、モチーフとして『1Q84』での記憶再生の装置である「放課後の小学校の教室」風景に結実させていると言える。これは、村上春樹ならではの創造的寓意の構図とも言えよう。

キーワード：『1Q84』 「放課後の小学校の教室」 記憶再生 漱石
『三四郎』

『1Q84』における記憶再生の装置

－漱石の『三四郎』を原型として－

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

村上春樹の最新長編小説『1Q84』BOOK1、BOOK2、BOOK3(2009-2010 以下、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと略称する)の主人公天吾と青豆は20年間離れていても、相手を捜し求め続け、再会できた。幾多の困難を乗り越えて果たした再会を見ると、『1Q84』は確かに先行研究で論述された「ピュアな恋愛小説」¹、「純愛小説」²である。ただし、恋愛小説として読む際、二人が執拗に拘っている「放課後の小学校の教室」の記憶は特に注目に値する。「放課後の小学校の教室」の記憶が徐々に色濃く蘇えったことに目を向けると、それは記憶再生の装置であったことが分かる。とりわけ、天吾が辿りついた「放課後の小学校の教室」の記憶の全貌の中心部(Ⅱ第18章)には、「高い空」に「白い雲」と「月」が伴っている。それは、漱石の『三四郎』(1908)で三四郎が美禰子と一緒に「白い雲」を見た場面を思わせ、三四郎の美禰子に託する思いの変化を「白い雲」と「月」との関係の度合によって表現していたことを髣髴とさせよう。山根由美恵は、村上春樹が「前期漱石文学を評価しつつも、後期における『自我と自分の外なる世界とのフリクション』の様が日本の小説の傾向を固めた」と批判的に語っている」³とし、「三角関係に拘る村上の漱石意識」⁴があると指摘している。このように、『1Q84』では、三角関係のモチーフを明確に出した漱石『三四郎』との関連性、村上春樹の漱石との連結への

¹平居謙(2010)『村上春樹の『1Q84 BOOK3』大研究』データーハウス P164

²風丸良彦(2010)『集中講義『1Q84』』若草書房 P61

³山根由美恵(2007)「『螢』に見る三角関係の構図--村上春樹の対漱石意識」『国文学攷』195号広島大学国語国文学会 P1-2

⁴同前掲山根由美恵論文 P2

追求は、避けて通れない課題である。そこで、主人公達の「放課後の小学校の教室」の記憶再生、また作者・村上春樹の漱石への記憶再生という観点から、『1Q84』の読みを深めたいのである。

手順としては、「放課後の小学校の教室」をめぐる青豆と天吾の記憶再生の装置及び構図を差異化する。そして、「放課後の小学校の教室」の記憶で蘇った「高い空」、「白い雲」、「月」などを漱石の『三四郎』と照合し、三四郎の美禰子への思いと対照させ、その類似性を指摘する。最後に村上春樹における漱石への記憶再生の装置を纏める。

2. 「放課後の小学校の教室」をめぐる天吾と青豆との差異性

主人公達の再会では「放課後の小学校の教室」が紐帶的位置を占めている。20年前のことを主人公達がどのように思い出したかを記憶再生の装置から検討し、それによって形成された主人公達の記憶の構図を差異化する。

2.1. 「放課後の小学校の教室」をめぐる記憶再生の装置

2.1.1 「放課後の小学校の教室」を「顕在記憶」(エピソード記憶)として蘇らせた天吾

天吾は本格的に青豆を捜し出すまで3回ほど青豆らしい存在を仄めかした。それは、ふかえりの養父戒野に会いに行く帰り道に、布教活動に出掛けるらしい親子に出会った場面(I 第12章 P270-276)、10歳年上のガールフレンドから学校でいじめられた子供の話を聞かされた場面(I 第6章 P136)、枝豆を買った場面(II 第4章 P86-93)である。布教活動、学校でのいじめ、青豆に関係が近い枝豆は、いずれも青豆の生い立ちに密接に関わった事柄である。記憶の原理に当たって見ると、浜日出夫が心理学的立場から記憶を「記銘・保持・

想起の3段階からなるもの」⁵とし、その第3段階に位置づけた「想起と物質の密接なかかわり」⁶を示す用例が示唆的である。それはブルーストによって「無意志的記憶」⁷と呼ばれている。

天吾が青豆に手を握られたことを思い出した描写は、作品中に散見されるが、「放課後の小学校の教室」の風景に直接触れた箇所は僅かである。しかし、度を重ねる間に、その記憶の輪郭がだんだん浮き彫りにされるようになった。例えば、青豆らしい存在を仄めかした1回目では、下記のような「放課後の小学校の教室」風景を伴って天吾の頭の中に浮かんできた。以下引用する。

その少女は天吾の手を握った。よく晴れた十二月初めの午後だった。窓の外には高い空と、白いまっすぐな雲が見えた。放課後の掃除が終わったあとの教室で、天吾と彼女はたまたま二人きりになっていた。ほかには誰もいなかった。彼女は何かを決断したように足早に教室を横切り、天吾のところにやってきて、隣りに立った。そして躊躇することなく天吾の手を握った。そしてじつと彼の顔を見上げた(天吾の方が十センチばかり身長がたかかった)。天吾も驚いて彼女の顔を見た。二人の目が合った。天吾は相手の瞳の中に、これまで見たこともないような透明な深みを見ることができた。その少女は長いあいだ無言のまま彼の手を握りしめていた。(I 第12章 P275 下線部分は論者による。以下同様。)

ここでは、「よく晴れた十二月初めの午後」、「放課後の掃除が終わったあとの教室」、「窓の外」、「高い空」、「白いまっすぐな雲」といった背景の中で、少女の「瞳の中に、これまで見たこともないような透明な深み」を見て、その少女に手を握られたことを天吾は記

⁵浜日出夫(2007)「記憶の社会学・序説」『哲学』117 三田哲学会 P2

⁶同前掲浜日出夫論文 P6

⁷同前掲浜日出夫論文 P7

憶している。

それに続き、枝豆を買った時(Ⅱ第4章 P86)、思い出した記憶にも同様に「少女」、「教室」が点在している。「その少女は放課後の教室で彼の手を堅く握り締め、澄んだ瞳で彼の目をまっすぐのぞき込んでいた」(Ⅱ第4章 P91)というように、「澄んだ瞳」を新たな要素として記憶が呼び覚まされた。

視覚以外にも嗅覚を伴って天吾が記憶を蘇らせたことは、特徴的である⁸。『1Q84』では、ふかえりとセックスする最中に、天吾は「放課後の小学校の教室」風景を思い出し「そこにある空気を実際に吸い込み、ニスの塗られた木材の匂いや、黒板消しについてのチョークの匂いを嗅ぐことができた」(Ⅱ第14章 P305-306)。リーダーを殺害後、閉じ籠もっていた青豆がタマルに勧められて読んだプルーストの『失われた時を求めて』『スワン家の方へ』(Ⅲ第5章 P94)にも、「ニスの匂い」が使われている。それを「階段のニスの匂いの記憶は、悲しみの記憶と結びつく」⁹と桑原隆行は分析しているが、それに対して、『1Q84』での「ニスの匂い」の刺激により呼び起こされた記憶は、プルーストの『失われた時を求めて』のような悲しみの記憶ではなく、青豆への懐かしみの記憶だと言ってよかろう。その後、「青豆の行方を捜すことにした」(Ⅱ第16章 P348)天吾は、青豆に手を握られたことを、「人生のひとつの転機」(Ⅱ第18章 P384)とし、青豆が「そのような変化を促してくれたのだ」(Ⅱ第18章 P384)と、青豆の存在意義を認めている。とはいえ、「なんといっても二十年も前に起こったことだ。そのときの情景をどれだけ鮮やかに覚えているといっても、具体的に思い出せることはやはり限られている」(Ⅱ第18章 P388)と、記憶力には限界があると天吾は気づいた。さらに、「記憶を掘り起こして」(Ⅱ第18章 P388)、「放課後の小学校の教室」

⁸天吾を悩ました1歳半の記憶が同じ傾向を表している。

⁹桑原隆行(2005)「ビュール・ロチとマルセル・プルースト階段の記憶と読書の記憶」『福岡大学研究部論集A人文科学編』5巻3号福岡大学 P2

風景の輪郭が徐々浮上した。

掃除のあとだったから、空気を入れ換えるために窓は大きく開けられ、白いカーテンが緩やかに風にそよいでいた。その向こうには空が広がっていた。十二月になっていたがまだそれほど寒くはない。空が高いところには雲が浮かんでいた。秋の名残をとどめたまっすぐな白い雲だ。ついさっき刷毛で引かれたばかりのように見える。それからそこには何かがあった。何かがその雲の下に浮かんでいた。太陽?いや、違う。それは太陽ではない。(Ⅱ第18章 P390)

ここで述べた「十二月」の季節は、前回とは変わらない。しかし、何故、季節はずれの「秋」をわざわざ取り立てて、「秋の名残をとどめたまっすぐな白い雲」を記憶に留め、「何かがその雲の下に浮かんでいた」というように、「白い雲」の側にある大事な「何か」に注意を向けているのであろうか。結論を先に言うが、こうした表現は、この場面のベースと見られる『三四郎』では、「秋」に三四郎が美禰子と一緒に「雲」を見たからである。『三四郎』では、「天長節」(四、P89)の11月3日に、三四郎と口を利く前の美禰子の様子を「風が女を包んだ。女は秋の中に立つてゐる」(四、P92)とし、また美禰子のわざとらしい所作が分かった時点で、美禰子と最初に見た「雲」の光景を三四郎に「美禰子と一所に秋の空を見た」(十二、P304)と想起させ、季節を「秋」に設定している。『1Q84』では「十二月」に起きた出来事なのに、わざわざ「秋」を取り立てた記述は、『三四郎』を強く意識して、援用したものに相違ない。

さらに、「息を止め、こめかみに指を当てて記憶をより深いところまでのぞき込もうとした」(Ⅱ第18章 P390)天吾は、「そこには月があった。まだ夕暮れには間があったが、そこには月がぼっかりと

浮かんでいた」(Ⅱ第18章P390)と気づいた。「月」と「夕暮れ」を関連づける風景は、それほど一般的ではない。まだ「夕暮れ」になっていないにもかかわらず、「夕暮れ」を意図的に「月」と関連させたところは、『三四郎』での美禰子の存在を暗示するとしか考えられない。詳論は次節に譲るが、「青豆はもう天吾の目を見ていなかった。その視線は彼が見ているのと同じ方向にむけられていた。青豆も彼と同じように、そこに浮かんだ白昼の月を見つめていた。天吾の手をしっかりと握りながら、とても真剣な顔つきで」(Ⅱ第18章P390-391)と続く「放課後の小学校の教室」の記憶の全貌がようやく浮き彫りにされた。このように、「よく晴れた十二月初めの午後」→「掃除のあと」→「教室」→「高い空」→「白い雲」→「瞳」→「白昼の月」(月と「夕暮れ」)というプロセスを経て、ようやく「月」にたどり着いたのである。このプロセスから、時の「十二月」、場所の「教室」、動作「手を握る」を除くと、「高い空」、「白い雲」、「月」という連結は、『三四郎』で恋心を抱く描き方、設定と、ほとんど変わりが無い。こうして「月がおれを青豆のいる場所に導いてくれるというのだろうか?」(Ⅱ第18章P391)と天吾は自分なりにその意味を解釈し、また「青豆はそのときひそかに、ある種の心を月に託していたのかもしれない、と天吾はふと思った」(Ⅱ第18章P392)。それを悟った天吾は結局「月」に導かれ、辿り着いた児童公園で、青豆が求める「ある日どこかで偶然彼と出会うこと」(Ⅰ第15章P340)という通り、二人は再会を果たしたのである。

天吾は記憶を手探りしながら、個々の重要な要素をジグソーパズルのように組み合わせることにより、個人生活史として「放課後の小学校の教室」の記憶が再生され顕在化された。天吾のような手順を踏まえ再構成された再生記憶は、記憶の理論では「顕在記憶」に含まれる「エピソード記憶」¹⁰である。顕在化された「エピソード

¹⁰ファーガス・I・M・クレーク著山口快生翻訳解説(2006)「加齢にともなう記憶の変化」

記憶」であるため、その後、父の療養所で空気さなぎに入った青豆を手で触り、「青豆、と天吾が言った。僕は必ず君をみつける」（Ⅱ第 24 章 P500）と、今までにない強い決心を見せ、また「青豆を見つけよう、天吾はあらためて心を定めた」（Ⅱ第 24 章 P501）と繰り返しているように、天吾には記憶の中で再生された青豆を捜そうとする堅い信念が生まれたのである。

2.1.2 「放課後の小学校の教室」を「潜在記憶」（体を使う技の記憶）として蘇らせた青豆

一方、天吾の「顕在記憶」（エピソード記憶）とは違い、青豆は「放課後の小学校の教室」で自分から天吾の手を握ったことにより生まれた、天吾への一筋な愛を信念として持っている。

例えば、友人あゆみに、「十歳のときにその人が好きになって、手を握った」（Ⅰ第 15 章 P340）と言い、「好きになった人は一人だけいる」（Ⅰ第 15 章 P340）と青豆は言った。そして、偶然な再会に「私がこの人生で愛した相手はあなた一人しかない」（Ⅰ第 15 章 P341）と告白することを理想としている青豆は、「彼に会いたい。死ぬほど会いたい。それだけは確かなことみたいね。それだけは自信を持って言える」（Ⅰ第 23 章 P527）と、あゆみに自分の気持ちを隠さずに言った。また、殺し屋の話を持ち出された老婦人に、「あなたは自分の十歳だったときのことを覚えています？」（Ⅰ第 17 章 P402）と聞かれた時、「よく覚えています」（Ⅰ第 17 章 P402）と答えた青豆について、「その年は彼女は一人の男の子の手を握り、一生彼を愛し続けることを誓った」（Ⅰ第 17 章 P402）と語り手が説明している。もし、天吾への一筋な愛を信念に持っていなかったら、青豆が他人に面と向かって、20 年間も会っていない、ただ一度だけ手を握った少年へ気持ちを率直に語ることはできないであろう。

「放課後の小学校の教室」風景を手探りする天吾と異なり、「天吾の記憶が残る。彼の手の感触が残る。心の激しい震えが残る。彼に抱かれないという渴望が残る。たとえ別の人間になったところで、天吾に対する想いが私からもぎ取られることはない」（Ⅱ第5章 P112-113）と、天吾のことを「潜在記憶」¹¹に含まれる身体的な「体を使う技の記憶」¹²として青豆は想起している。さらに、「私という存在の中心にあるのは愛だ。私は変わることなく天吾という十歳の少年のことを思い続ける。彼の強さ、聡明さと、優しさを思い続ける」（Ⅱ第5章 P113）と自分の天吾への愛を確信している。

2.2 記憶再生の装置から見た天吾と青豆との構図

「放課後の小学校の教室」を天吾が「顕在記憶」で再生し、青豆が「潜在記憶」として蘇らせた点には、両者に共通する記憶に対する対応の相違が見られる。さらに、天吾は「放課後の小学校の教室」を「エピソード記憶」として想起し、その全貌を蘇らせてから、ようやく青豆を本格的に捜す決心をした。裏返して言えば、「放課後の小学校の教室」の記憶再生が完成しないと、天吾は青豆への愛を十分に確信できず、その恐れのために相手捜しを行動に移すことはできないのである。一方、青豆は「放課後の小学校の教室」を「体を使う技の記憶」として想起し、手を握ったことから生まれた天吾への愛を強く信じて恐れていない。このように、二人は20年間同じように相手に恋心を抱いているにもかかわらず、記憶再生の装置との関係の相違によって、取った行動パターンも異なり、「顕在記憶」による愛を認識する男（天吾）対「潜在記憶」による一筋の愛を信念に持ち続ける女（青豆）という構図が、物語を貫く構造として、この記憶の対比から生まれている。同時に、ここには漱石文学での男女関

¹¹同前掲ファーガス・I・M・クレーク著山口快生翻訳解説 P77

¹²同前掲ファーガス・I・M・クレーク著山口快生翻訳解説 P78

係である「恐れる男と恐れない女」¹³といった構図も連想されよう。漱石と村上の間には、大きな時代的隔たりがあるとしても、謎めいた男女関係を象徴的に開示した構図は、共通していると言えよう。

3. 『1Q84』の漱石『三四郎』との照応

以上、見てきたように『1Q84』の天吾と青豆の関係には、漱石の『三四郎』の三四郎と美禰子との関係と深い照応が見られる。『三四郎』では、美禰子と一緒に「白い雲」を見てから三四郎は美禰子に恋心を抱くようになった。しかし、その後、三角関係のライバルとされる野々宮と美禰子との間の曖昧な関係、美禰子の結婚話を知らされたことにより、美禰子への思いには変化が生じた。詳しくは、「夏目漱石の漢詩と小説とのかかわりー『三四郎』における「雲」」¹⁴を参照されたいが、以下、その要点だけを述べることにする。

3.1 美禰子と一緒に「雲」を見た場面ー「高い空」、「白い雲」、「月」

三四郎は、美禰子と「雲」を2回一緒に見た。1回目は、天長節に広田が新しく借りた家に引っ越す際の手伝いに来た時である。掃除が終わった2階では、二人で「白い雲が大きな空を渡つてゐる。空は限りなく晴れて、どこ迄も青く澄んでゐる上を、綿の光つた様な濃い雲がしきりに飛んで行く。風の力が烈しいと見えて、雲の端が吹き散らされると、青い地が透いて見える程に薄くなる。あるひは吹き散らされながら、塊まつて、白く柔かな針を集めた様に、さゝくれ立つ」(四、P97)といった光景を見た。その「白い雲」の様子を美禰子は、「駝鳥の襟巻に似てゐるでせう」(四、P97)と三四郎に言い出したが、三四郎は、「あの白い雲はみんな雪の粉で、下から見て

¹³鳥居邦朗(1991 初 1965)「行人」浅田隆・戸田民子編『漱石作品論集成』第9巻桜楓社 P68

¹⁴曾秋桂(1989)「夏目漱石の漢詩と小説とのかかわりー『三四郎』における「雲」ー」『第十三回国際日本文学研究集会会議録』国文学研究資料館 P80-97

あの位に動く以上は、颶風以上の速度でなくてはならない」(四、P97)と、その前に科学者の野々宮から聞いた話をそのまま美禰子に返事したところ、「雲は雲でなくつちや不可ないわ。かうして遠くから眺めてゐる甲斐がないぢやありませんか」(四、P97-98)とすぐ反論された。「白い雲」に愛着があり、主張を曲げることを許さない美禰子とは対照的に、「田舎者」(二、P23)三四郎は、知識を伝達するパイプに過ぎない。

2回目は、皆と菊人形を見に行つた時に、同行者とはぐれた美禰子と、後について来た三四郎の二人で、見た「雲」である。「透き徹る藍の地が消える様に次第に薄くなる。其上に白い雲が鈍く重なりかゝる」(五、P131)といった「白い雲」の様子を、美禰子は「重い事。大理石の様に見えます」(五、P131)と言つた。その後、美禰子からもらった「其縁に羊を二匹寐かして」(六、P143)と描いてある「端書の裏に、迷へる子を二匹書いて、其一匹を暗に自分に見立てゝ呉れたのを甚だ嬉しく思つた」(六、P143)三四郎は、ますます美禰子に心を引かれ、「白い雲」を美禰子の象徴として見るようになったのである。何故なら、広田先生の講演を聞いた後、「月を見て歸つた」(九、P224)与次郎と三四郎の二人では、途中「君、あの女(美禰子のこと。論者注)を愛してゐるだらう」(九、P226)と聞かれ、「ふんと云つて、又高い月を見た」(九 P226)三四郎の目には、歴然として「月の側に白い雲が出た」(九、P226)と映っているからである。つまり、美禰子の話題になると、「月」の側に美禰子を象徴する「白い雲」がクローズアップされて見えるようになったのである。こうして見ると、美禰子への思いを託した「月」と美禰子の存在を象徴する「白い雲」との連結がここでできたと言えよう。その後、美禰子の結婚話を知つた三四郎が借金を返そうと、教会へ行つて美禰子を待っている間、「空に美禰子の好な雲が出た」(十二、P304)。続いて、「迷羊。迷羊。雲が羊の形をしてゐる」(十二、P304)と美禰子と一緒に

見た「雲」の思い出を未練がましく繰り返している。だが、教会から出た美禰子に金を返した後、美禰子の口から「ヘリオトロープ」(十二、306)と聞いた途端、三四郎は心にもないことを自分の前でわざとらしく演出した美禰子の作為を悟った。というのは、「ヘリオトロープ」とは、かつて「四丁目の夕暮れ」(十二、306)、買い物の際に出会った美禰子に意見を求められ、勧めた香水の名前だが、美禰子はわざと「それに為ませう」(九、231)と言って別な香水を買ったのに、買わなかった「ヘリオトロープ」をこの場面で三四郎に言い出したからである。美禰子のこうした演出を悟った時、事実が青天白日に晒されるかのように「空には高い日が明かに懸る」(十二、P306)光景になった。「雲」もなく「月」もない「空には高い日が明かに懸る」は、三四郎の気持ちを代弁する隠喩であろう。美禰子という女性は、かつて広田先生に「あの女は落ち付いて居て、亂暴だ」(六、P147)と評され、与次郎に「イブセンの女のような所がある」(六、P147)と言われた。この批評と合わせて見ると、美禰子は確かに自分の意志に忠実に動く女である。恋心を抱いた美禰子の演出を悟った三四郎の美禰子への思いもそろそろ醒める時期になったと言ってもよからう。要するに、「白い雲」と「月」との関わり合いの度合を中心に検討すると、段階的に変化した三四郎の美禰子への思いの軌跡が明確になるのである。

つまり、『三四郎』における「白い雲」の描き方は意図的である。三四郎が美禰子と「雲」を見た1回目よりも前に、「青い空の静まり返った、上皮に、白い薄雲が刷毛先で掻き拂った痕の様に、筋違に長く浮いてゐる」(二、P33)と三四郎が野々宮を尋ねに行った時に見た光景が描出されている。そのとき、野々宮は「あれはみんな雪の粉ですよ。かうやつて下から見ると、些とも動いて居ない。然しあれで地上に起る颶風以上の速力で動いてゐるんですよ」(二、P33)と三四郎に説明し、科学者たる面貌躍如である。前述のように、三

四郎は、野々宮の説を考えずに受け入れ、美禰子にそのまま言ったが、美禰子に強く反論され、黙ってしまった。「白い雲」はただの景物ではなく、「白い雲」に対する三四郎、美禰子、野々宮の見方がそれぞれの持つ個性を雄弁に語っている徴表なのである。

3.2 『三四郎』をアレゴリー化した『1Q84』

『三四郎』で美禰子の存在のアレゴリー¹⁵と見られる「白い雲」と、「月」との関り合いの度合は、三四郎の美禰子への思いの変化を意味している。『三四郎』のように三角関係をモチーフにしたわけではないが、『1Q84』には、『三四郎』の読書行為を通して村上が残した漱石の痕跡は少なくとも3点ほど見られる。まず、『三四郎』で使われた要素「高い空」、「白い雲」、「月」のセットが、天吾に「顕在記憶」として想起された「放課後の小学校の教室」の映像の中核をなしていることが挙げられる。次は、青豆が天吾の手を握った12月の「放課後の小学校の教室」の情景は、三四郎と美禰子が見た秋の「雲」の場面と重ねて見るができることである。また、その12月の「放課後の小学校の教室」の情景にある「秋の名残をとどめたまっすぐな白い雲だ。ついさっき刷毛で引かれたばかりのように見える」（Ⅱ第18章P390）というシーンは、科学者野々宮が見解を示した場面にある「白い薄雲が刷毛先で掻き拂つた痕の様に」といった描き方との類似が見られる。以上の3点から、村上春樹は「白い雲」、「月」で象徴化された三四郎の美禰子への思いを、記憶と想起の構図に変換し、物語全体を貫くモチーフとして天吾の青豆への思いに書き換えたと考えられる。天吾と青豆の恋の原型は『三四郎』に求められると言っても差し支えなからう。とは言っても、『1Q84』は『三四郎』の焼き直しではない。まず、『三四郎』の結末となって

¹⁵アレゴリーは寓意で、抽象的な概念を具象的な事物にして示す比喻である。例えば、公正を天秤で、純潔を白色や百合で表すのと同じである。

いる女性の選択による三角関係の解消という書き方は捨てられ、『三四郎』の前半でクローズアップされた三四郎が美禰子に出会った純粋な心の震えの描写が、『1Q84』では全篇を動かす天吾と青豆の強烈な恋のモチーフとしてアレゴリー化されている。また、三四郎にとっては直接知ることのできなかつた美禰子の恋は、『三四郎』では一方向的な関係であったのに対し、『1Q84』では、青豆の恋は「潜在記憶」の表明として、女性の側から主体的に語り出される相互的な関係に置換されている。『三四郎』では物語を貫く恋のモチーフの主導権は美禰子にあり、それが物語を支配していたが、『1Q84』では、「放課後の小学校の教室」風景を巡る天吾の「顕在記憶」と青豆の「潜在記憶」という相互補完性が恋の構造となっている。ここでは主導権ではなく、見失った相手を回復するという一種の探究、探索が恋の基本的構造となっている。

『三四郎』をアレゴリー化したとは言え、『1Q84』におけるこうした男女関係の構造変化の意味は非常に大きいと言えるであろう。

4. 漱石の一読者としての村上春樹の記憶再生—結論に代えて

最近の村上春樹研究¹⁶では、漱石と関係づけて村上文学を考えようとする傾向が見られる。村上春樹は2008年にマレーシア出身の村上春樹翻訳家葉蕙のインタビューを受けた時¹⁷に、漱石文学の中で『三四郎』が一番好きだと述べている。また、2010年、『1Q84』の執筆後、松家仁之によるロングインタビュー¹⁸でも、『三四郎』の面

¹⁶佐藤泰正(2001)「村上春樹と漱石—〈漱石の主題〉を軸として」『日本文学研究』36号
梅光女学院大学文学部、山根由美恵(2007)「『螢』に見る三角関係の構図—村上春樹の
対漱石意識」『国文学攷』195号広島大学国語国文学会、小森陽一・ルービン・ジェイ(2010)
「対談『1Q84』と漱石をつなぐもの」『群像』65巻7号講談社、柴田勝二(2011)『村上
春樹と夏目漱石』祥伝社など。

¹⁷2008年10月29日のインタビュー。

<http://paper.wenweipo.com/2008/11/17/OT0811170005.htm>(2012年6月10閲覧)

¹⁸(2010)「特集村上春樹ロングインタビュー」『考える人』N033新潮社P62-63では、
「好きなのはなんといっても『三四郎』『それから』『門』の三部作。(中略)どうも好き
になれないのは『こゝろ』と『明暗』。(中略)『それから』とか『三四郎』なんかは、
読んでいて唾然とするところがあって、そういうところが僕にはおもしろいし、好きな

白い所を指摘し、好きだと表明している。村上春樹の創作に『三四郎』が具体的にどのように関わっているかを今回の論考で明確にした。のみならず、漱石の一読者としての村上が『三四郎』の読書行為を通して内在化したものを、自らのモチーフである記憶と想起の物語に置換し、『1Q84』での記憶再生の装置である「放課後の小学校の教室」という風景に結実させた点は、村上春樹ならではの創造的寓意の構図とも言えよう。漱石との関係あるいは『三四郎』の影響と言っても、基本的には誰が主導権を持つのかという図式で男女関係を描いている『三四郎』に対して、失われた関係を回復する行為として男女の恋を捉えた『1Q84』の男女関係の構図は、次元がまったく異なっている。本論の記憶再生の装置という観点に立った考察から見ると、20 世紀初頭の漱石の物語の基本的モチーフは、1 世紀後の現在、村上春樹によって新たな構造に置換、あるいは変換されようとしていると見ることもできよう。村上春樹の探究に対する読み込みは、その点で 20 世紀的な日本文学の基本的モチーフの変換の作業とも言えよう。それはとりもなおさず、私達が 20 世紀を越えた新世紀に入り、従来とは異質な社会像や人間像の探究を必要としていることの証とも言えよう。村上春樹文学を、そうした 21 世紀社会の探究過程のひとつの道標として読み返すことには、貴重な示唆や道案内が刻まれているのである。

(本論文は、淡江大学日本語文学科・村上春樹研究室によって開催された「2012 第 1 届村上春樹国際学術研討会」(2012. 6. 23) で口頭発表した内容を加筆、修正したものである。)

テキスト

村上春樹(2009)『1Q84』BOOK1、BOOK2 新潮社

んです。思わず虚を突かれるというか」とある。

村上春樹(2010)『1Q84』BOOK3 新潮社

(1975・初 1966)『漱石全集』第四巻岩波書店

参考文献

I 書籍、雑誌論文

鳥居邦朗(1991・初 1965)「行人」浅田隆・戸田民子編『漱石作品論集成』第9巻桜楓社

曾秋桂(1989)「夏目漱石の漢詩と小説とのかかわりー『三四郎』における「雲」ー」『第十三回国際日本文学研究集會會議録』国文学研究資料館

佐藤泰正(2001)「村上春樹と漱石ー〈漱石的主題〉を軸として」『日本文学研究』36号梅光女学院大学文学部

桑原隆行(2005)「ピエール・ロチとマルセル・フールスト階段の記憶と読書の記憶ー」『福岡大学研究部論集A人文科学編』5巻3号福岡大学

ファーガス・I・M・クレーク著山口快生翻訳解説(2006)「加齢にともなう記憶の変化」『文藝と思想』第70号福岡女子大学文学部

浜日出夫(2007)「記憶の社会学・序説」『哲学』117三田哲学会

山根由美恵(2007)「「螢」に見る三角関係の構図ー村上春樹の対漱石意識」『国文学攷』195号広島大学国語国文学会

平居謙(2010)『村上春樹の『1Q84 BOOK3』大研究』データハウス

風丸良彦(2010)『集中講義『1Q84』』若草書房

小森陽一・ルービン・ジェイ(2010)「対談『1Q84』と漱石をつなぐもの」『群像』65巻7号講談社

(2010)「特集村上春樹ロングインタビュー」『考える人』N033新潮社

柴田勝二(2011)『村上春樹と夏目漱石』祥伝社

airiti

頼明珠・張明敏訳(2011)『『1Q84』之後 村上春樹 Long Interview
長訪談』時報出版

Ⅱ インターネット資料

2008 年 10 月 29 日のインタビュー。

<http://paper.wenweipo.com/2008/11/17/0T0811170005.htm>(2012
年 6 月 10 閲覧)

Works Cited

Craik Fergus I. M. (Trs.)Yamaguchi, H.(2006) Age-related changes in human
memory. *Bungei to Shiso*, NO.70. Fukuokajyoshi University,
Japan.

Hama, H. (2007) Introduction : Sociology of Memory(Sociology of
Memory).*Tetsugaku*,NO.117. Mitatetsugakukai, Japan.

Hirai, K.(2010)*Murakami haruki no “1Q84 BOOK3” daikenkyu*. Deitahausu,
Japan.

Kazemaru, Y.(2010)*Shuchukougi “1Q84”*. Wakakusa shobo, Japan.

Komori, Y.& Jay, R.(2010)*Taidan “1Q84” to Soseki wo tsunagumono*.
Gunzo,NO.65-7. Kodansya, Japan.

Kuwahara, R.(2005) Pierre Loti et Marcel Proust : le souvenir d'escalier et de
lecture. *Fukuoka Daidaku kenkyubu ronshu A Jinbunkagakuhen*,
NO.5-3. Fukuoka University, Japan.

Murakami, H. (2010)*Tokushu: Murakami Haruki rongu intabyu*.
Kangaeruhito,NO.33. Shinchosha, Japan.

Sato, Y.(2001)*Murakami Haruki to Soseki: “Sosekiteki shudai” wo jikutoshite*.
Nihonbungaku Kenkyu NO.36. Baikojoyogakuin University,
Japan.

Shibata, S.(2011)*Murakami Haruki to Natsume Soseki*. Shodensha, Japan.

Torii, K.(1991)”Kojin”. In Asada, T.& Toda, T (Eds.) *Soseki sakuhinron yhsei*,

Tseng, C.(1989) Natsume Soseki no kanshi to shosetsu tonokakawari: "Sanshiro" niokeru "Kumo". 13rd. *Kokusai Nihobungaku kenkyu shukai kaigiroku*. National Institute of Japanese Literature, Japan.

Yamane, Y.(2007) "Hotaru" nimiru sankakukankei no kouzu: Murakami haruki no tai Soseki ishiki. *Kokubungakukou*, NO.195. Hiroshimadaigaku kokugokokubungakkai, Japan.

※2012 年 8 月 31 日受理 2012 年 11 月 10 日審查通過